

えにし 里帰りした 薬師寺東塔「縁の瓦」

辰野中学校
校長 河手 密

国宝であり、世界文化遺産に指定されている薬師寺東塔。裳階をつけたリズムカルな姿は『凍れる音楽』と親しまれ、日本で最も美しい三重塔と言われています。その東塔を平成21年、110年ぶりに解体修復を行っていたところ、長野県内の小・中・高校308校の学校名が刻まれた瓦が345枚発見されました。その瓦の一枚に、

長野県上伊那郡 川島中学校

昭和26年修補

瓦製造商 奈良市 鈴木又市

と刻まれていたのです。

まさしく、昭和22～33年まで大勢の生徒が通った旧川島村立「川島中学校」です。三層東面の一枚として、60年以上にわたって風雨や暑さ寒さから国宝の東塔を守り続けていたのです。東塔の瓦に「川島中学校」の学校名がどうして刻まれていたのでしょうか？

昭和26年、まだまだ戦後の苦しい生活の頃、アイスキャンディー一本2～3円の時代に、薬師寺から東塔修復のために募金協力の依頼を受けた川島中学校では、生徒一人5円を目安に各自の自由意思による募金を集めて薬師寺へ送りました。時代が時代です。

たった1回限りの修学旅行でも行くか行かないかのお寺、繋がりが特に深いわけでもない奈良のお寺から寄付を頼まれたら、「寄付してみよう」という気持ちにすぐになれるのでしょうか？

今回、東塔を解体してわかったことがあります。

- ①昭和26年の寄進瓦は全部で4,815枚。その全てに寄付者の名前を手彫りで彫り込み、時間と手間をかけて瓦を丁寧に焼き上げてあって、当時の職人は大変優れた技術をもっていた。
- ②瓦に学校名が刻まれていたのは、全国で長野県内の小・中・高校だけで、他県は1校もなかった。しかも、その数は308校にのぼった。
- ③名前や校名が刻まれていたのは瓦の裏面（凸面）なので、外から直接見ることはできないが、東塔は瓦一枚一枚の裏面に寄付者への感謝思いを込め、それを織り重ねて美しく造られていた。

戦後の苦しい時代に募金に協力してくれた子どもたちの心を決して忘れないよう、薬師寺では国宝東塔



解体修理前の東塔（薬師寺HPより）



本校に里帰りした「縁の瓦」

（資料提供、信濃教育会）

に載せる瓦に学校名を刻み、人や時代が変わっても川島中学校生徒への感謝の心を後世まで伝え続けていたのです。

「縁の瓦」を見ると、自らは60年以上も風雨や寒暖にさらされながら、堂々と東塔を守り抜いてきた自負心と神々しさを感じます。またそれは、食べものや欲しいものを我慢してでも国宝や日本文化を残そうとした、川島中生徒の純粋な気持ちとも重なります。

「縁の瓦」に込められている生徒（現在では80歳前後になられると思います）の純真無垢な心も大切に受け継いでいきたいと思います。

3年生は3月に薬師寺の小林澤應さんによる講話と、修学旅行では2組4組が薬師寺を訪れて法話をお聞きしました。本校に里帰りした「縁の瓦」は薬師寺と川島中学校を繋いでいるとともに、私たちが普段感じられる縁だけでなく、年月や時代を超えた繋がりにも感謝し、尊ぶことの大切さを改めて教えてくれました。

保護者や地域の皆さんも本校へご来校の際には、薬師寺東塔「縁の瓦」をぜひご覧ください。（「縁の瓦」は、中央廊下のガラスケース内に展示・保管しています）

平成29年7月11日、信濃教育会館で「薬師寺東塔『縁の瓦』里帰り式」が行われ、本校からは臼井慎詞教頭が出席して「縁の瓦」を受領いたしました。

～ 「縁の瓦」への思い ～

【元薬師寺管主、山田法胤さん】

奈良の古建築の美しさは薨の織りなす構成美にある

その美しさを脈々と守り続けてきた瓦がここにある

【個人寄付した斉藤さん】

瓦は生きている

夏の日射しに高温を発し 冬の冷気に氷の塊となる

それでも雨を一滴も漏らさぬよう

長い年月を耐えに耐えて今日を迎えた

その瓦に心を吹き込んでくれた多くの子どもたちの思い

それが箆書として刻まれている

【瓦職人さん】

今、この瓦は瓦という物体ではなく

懐かしい母校そのもの

懐かしい友、恩師、父母 … 人々の愛がそこにある